



助産師のための フィジカルイグザミネーション

評者・水上 尚典 北海道大学大学院医学研究科産科生殖医学分野教授

「助産師にはもっと活躍して欲しい!」と私は常々思っている。

英国で行なわれた研究を紹介する。研究目的は助産師が責任を持って妊娠分娩を管理した場合、妊娠予後はどうなるか?である。2,734名のローリスク妊婦が無作為に2対1の割合(1,819名と915名)で助産師管理群と医師管理群に分けられた。医師管理病棟と助産師管理病棟はわずかに15mしか離れてない状況での研究である。

結果、50%の妊婦は妊娠中あるいは分娩中に医師管理群となった(異常出現のため)が、46%の妊婦は助産師管理のまま分娩が終了した。予後は当初振り分けられた1,819名(助産師管理群)と915名(医師管理群)の2群間で比較された。早産率、自然経膣分娩率、帝王切開率、吸引鉗子分娩率、周産期死亡率、NICU入室率のいずれにも2群間で差は認められず、分娩中の妊婦自由度は助産師管理群で高かった。

本邦では99%の分娩が産婦人科医師の立ち会い(責任)のもとに行なわれているが、世界を見渡してみるとそのような国は珍しい。多くの国で、助産師がより多くの妊娠・分娩で主導的役割を果たしている。研究報告の多くは「助産師が責任を持ち、助産師が深く関与した妊娠・分娩においては当該産婦の満足度が高いこと」を指摘している。

また、全分娩の約3割は妊娠全期間を通じて数

助産師が知っておきたいフィジカル
イグザミネーションを網羅した1冊



我部山キヨ子・大石時子 編
定価 3,570 円(本体 3,500 円+税 5%)
A 4 判/医学書院/2008 年

回の医師の診察のみ(助産師が妊娠分娩管理を行なう)で良好な妊娠予後が得られることが示唆されている。一方、本邦の周産期医療においては、さまざまな要因により産婦人科医は多忙を極めている。そのこともあり、助産師のより一層の活躍が期待されている。

妊婦健診の目的は異常の早期発見にある。どのような状態が異常かをあらかじめ医師との間で決めておき、その異常発見のための検査法もあらかじめ決めておけば、助産師の妊婦管理における役割増大が期待できる。また、分娩中の異常についてもあらかじめ医師との間で決めて

おき、異常発見後、医師管理とするような取り決めを行えば、分娩における助産師の役割増大が期待できる。

本書は、妊娠中の問診、聴診、触診から超音波診断装置による診察法にいたるまで、助産師が主体性を持って異常妊娠を識別するうえで必要なフィジカルイグザミネーションの知識と技法を解説している。また、産褥期のフィジカルイグザミネーション、乳房や新生児のフィジカルイグザミネーション、子ども虐待発見のためのフィジカルイグザミネーションも網羅されており、助産師の知識や技術の向上がはかれるような書となっている。このような時期に本書が世に出ることは、非常に時宜を得たものであり、本書をお薦めする次第である。